

ブータン王国の造形教育 II

— 実践研究を通じた造形教育の可能性の検討 —

Art Education in the Kingdom of Bhutan II

— Possibility of Art Education through the Practical Study —

横浜国立大学 大泉 義一

I 緒言：前研究の成果と問題の所在

1. 研究の発端

本研究は、大学美術教育学会誌第43号に掲載されている研究論文「ブータン王国の造形教育—GNHから見出されるデザイン教育としての可能性—」(以降、「前研究」と記す)の継続研究である。¹⁾前研究の通り、ブータン王国(Kingdom of Bhutan)は、「GNH(Gross National Happiness)・国民総幸福量」という概念でよく知られるヒマラヤの麓に位置する立憲君主制の小国である。GNHとは国民全体の幸福度を示す質的な尺度であり、経済的・物質的な豊かさを中心とした国際社会への警鐘を鳴らす概念として注目されている。そして教育は、そのGNHの重要な柱の一つとなっている。筆者は、今後ますます急速な現代化を迎えるだろうブータン王国において、造形教育がどのような位置を獲得していくのかについて強い興味を抱いている。なぜならば全世界規模で進展するグローバル化の中で仏教思想に根差した社会(本来的には我国も同様である)が造形美術文化に見出す教育的意義からは、我国の造形教育に対する示唆を見出すことができるのではないかと考えるからである。

2. ブータン王国における造形教育の意義

筆者は前研究において、2011年3月7日から11日にかけて、ブータン王国の首都ティンブーで現地調査を行った。ブータン王国では現在のところ、造形教育は、音楽、体育とともに学校裁量の教科として位置付けられているのみである。そこで前研究では、以下の教育実践を視察することとした。

- ・伝統芸芸院(Zorig Chusum/ゾーリン・チュスム)における伝統美術の専門教育(図1)
- ・学校教育(Jigme Losel Primary School/ジグメ・ロセル小学校)における総合学習で扱われている造形表現
- ・学校教育外のNGO(“VAST Bhutan”)による造形教室

以上の視察および関係者へのインタビューを通して、ブータン王国における造形教育の意義を、次のように整理した²⁾。

「① 伝統美術の保護と継承のための教育」、「② 仏の教え(信仰)を通じた教育」、「③ 主体的な問題解決を促す教育」、「④

関係性を構築するための教育」、「⑤ 新しい意味や価値を生成するための教育」である。すなわち、職能開発と関連付けられた実践としての意義、仏教に対する信仰と造形とが融合している理想的実践としての意義、そして子どもが主体となった学習プロセスにおける問題解決において関係性を構築する学習としての意義を見出すことができたのである。

しかしながら、これらの意義はシングル・ケースの現地調査に基づいた仮説的見解である。さらなる調査研究の継続を通して、より実証的に検討していく必要がある。

II 目的と方法

以上の問題の所在から、本研究では前研究で見出した仮説的知見である造形教育の意義を教育実践レベルで検討することを目的とする。そのために筆者は、前研究に引き続き、2012年3月6~10日の日程で、下記内容の現地調査を行った³⁾。

- 1) 筆者による現地学校における造形教育の授業実践と教師に対するインタビュー調査
- 2) 現地学校における造形教育の授業実践の参観と授業者へのインタビュー調査
- 3) 現地学校の教師に対する授業設計に関するインタビュー調査

前研究では、ブータン王国の教育全体の視座から造形教育の意義を検討したのであるが、本研究では、学校教育における造形教育の授業実践に焦点化し、その実践研究や現場教師

へのインタビュー調査を通して、より具体的な様相から学校教育としての教育的意義を分析する。

よって前研究で見出された意義のうち、本研究では特に、「③ 主体的な問題解決を促す教育」、「④ 関係性を構築するための教育」、「⑤ 新しい意味や価値を生成するための教



図1 伝統芸芸院での「絵付け(仏画)」の授業

育としての意義」について検討することとした。

III 現地学校における造形教育の授業実践

1. フィールド・エントリーの経緯と対象

現地学校で、外国人である筆者が授業実践を行う対象を決定するにあたって重視したのは、依頼先との教育的信頼関係である。そこで前研究の調査で訪問し、授業参観やインタビューを行っているジグメ・ロセル小学校に打診した。すると学校長である Choki Dukpadearu 氏からは、二つ返事で快諾を得ることができた。対象となる子どもたちは、筆者が想定している学習内容と授業者と子どもたちとのコミュニケーションの取りやすさから、Class VI (11~12歳)の子どもたち42名とした。さらに本授業実践は、前研究でも取り上げた、GNHに基づいた同校独自の教育活動である“Sharing Time”として位置付けられた。この“Sharing Time”には一学年ごとにトピックスが設けられているが、学級の子どもの実態やニーズに応じた課題を設定することも可能となっている⁴⁾。また学校長は、前研究のインタビューで「子どもたちにとってはすべての体験が意味あることである」と話していたことからわかるように、学校外部の人材によるゲスト・ティーチャーが行う教育実践活動に大きな意義を見出している。こうして、本授業実践が同校における正規の教育課程の中に位置付けられることになったのである。(図2)



図2 ジグメ・ロセル小学校における授業実践の様子

2. 授業実践の内容

(1) 題材名

『マーブリングの形や色を味わって

／ Let's enjoy the shape and color of Marbling 』

(2) 準備

- ・マーブリング液 ・トレイ ・竹串 ・和紙
- ・団扇(白色) ・麻紐 ・クリップ
- ・環境構成：2~3人一組になって活動する。屋外廊下に麻紐を張っておき、マーブリングで彩色した和紙や団扇

をクリップで吊るして乾燥させるとともに、マーブリングの形や色の美しさを子ども同士で味わうことができるようにする。

(3) 授業のねらい

本授業実践では、前研究で得られた知見(先述した造形教育の意義③, ④, ⑤)をふまえ、以下二つの学習目標を設定した。そしてこれらの学習目標が、ブータン王国の子どもたちや教師たちに、どのように受容されるのかを分析することとした。

- ・マーブリングの技法から生まれてくる形や色の美しさを味わうようにする。

事前調査から、マーブリング(Marbling)技法が、ブータン王国の子どもたちにとって初めて出会う美術文化であることを確認することができた⁵⁾。ゆえに技法への興味や、技法を通じた自らの行為から生まれてくる形や色は、子どもたちに新鮮な感覚をもたらすであろうと考えた。

- ・生み出された形や色の美しさを、自分たちの生活に生かすようにする。

先述したように、本授業実践は、同校の“Sharing Time”として位置付けられることとなった。そこで、子どもの主体的な問題解決能力の育成を学習目標として設定した。

(4) 授業の展開概要

- 1) 現地打合せ・環境設定と準備
- 2) 活動の提案・マーブリング技法の説明
- 3) 活動Ⅰ：マーブリング技法による和紙の彩色
- 4) 活動Ⅱ：マーブリング技法による団扇の彩色
- 5) 相互鑑賞・交流

3. 活動の様子

(1) 現地打合せ・環境設定と準備

実践前日に挨拶をかねて学校を訪問し、学校長、副学校長と打合せを行った。そして当日の実践直前には、学校長、副校長の献身的な協力を得ながら、教室内外の環境設定を行った。写真記録は、同行していた現地ガイドに依頼した。

(2) 活動の提案・マーブリング技法の説明

教室に入ると、子どもたちが一斉に起立して迎えてくれた。筆者は挨拶と自己紹介を行い、授業を開始した。まず、子どもたちを教室前方に集め、マーブリング技法を実際にやってみせながら、活動の提案を行った。加えて、マーブリング技法の起源を説明し、「静かに、丁寧に、心をこめて」という技法上のポイントを伝えた。子どもたちは大変興味をもって筆者の説明と提案を聞いていた。(図3) また筆者が説明している最中、その内容を学級担任教師が板書に記録していた。(図4) そして筆者から一通りの説明と提案が終わった時点

で，学校長が板書の内容を自らの合図とともに子どもたちに復唱させていた。



図3 マーブリング技法の説明を熱心に聞く



図4 筆者の説明内容を板書する教師

(3) 活動Ⅰ：マーブリング技法による和紙の彩色

和紙の彩色は，一人につき3枚程度行うことを想定していたが，どの子もそれ以上の枚数に彩色することを希望し，準備していた和紙はすべて使い切ることとなった。このことから，子どもたちが強い興味をもって活動している様子が見えた。しかしながら活動が雑になるということはなく，トレイの水を率先して取り替え，常に発色がよくなるように配慮しており，筆者が教授した内容（それは同時に学級担任教師が板書し，学校長が子どもたちに復唱させた内容である）を的確にふまえようとする姿勢が見られた。またマーブリングの行為を行うトレイを2～3人一组で使用させたのであるが，用具や材料を譲り合いながら使うことが自然にできてお



図5 一緒に活動する子どもたち

り，教師からの共同で行うことに関する指導を必要としていなかった。むしろそうした場面では，マーブリングによって作り出されてくる形や色やその変化を，子ども同士で話し合いながら見あったり，一緒にマーブリング液を落として共同で模様をつくり出したりしている姿が印象的であった。

(図5)

(4) 活動Ⅱ：マーブリング技法による団扇の彩色

続いて，竹柄に白い和紙が張ってある団扇に一人一本ずつ彩色する活動を行った。ブータン王国には団扇という生活用具は存在しないので使い方を説明すると，その利便性に子どもも教師も感心していた。子どもたちは「活動Ⅰ」での和紙への



図6 彩色された団扇

彩色の経験をふまえて，団扇にどのような模様を定着させるのかを考えながら彩色を工夫していた。(図6)

(5) 相互鑑賞・交流

片付けを行った後，自分たちが作り出した形や色の相互鑑賞を行った。その際，自分たちが彩色した和紙を自分たちの生活にどのように生かすことができるのかを考え合っている姿が見られた。聞き取ることでできた子どもたちの考え(アイデア)は以下の通りである。

- ・鉛筆立ての箱に貼って飾る。
- ・壁に貼って飾る。
- ・再生紙でつくったバッグに貼って飾る。
- ・お母さんにプレゼントする。

最後に，学校長の指導のもと，子どもたちからの感謝の言葉があった。

4. 授業実践後のインタビュー

実践後に，学校長にインタビューする機会を得た。以下はその要点である。

(1) 子どもたちの様子について

普段よりも“Open mind”であった。つまり開放的な様子が見られた。それは今回の活動が，頭脳だけでなく身体や感覚を発揮するものであったからであろう。また，マーブリングのような“Art”が存在していることへの驚きや，私たちの身の回りにもこうした“Design”が存在しているかもしれないことへの気づきが財産となったと考える。子どもたちがとても積極的な様子だったことから，「やってみよう」という気持ちをもって取り組んでいたと思う。子どもたちが色の組み合わせや微妙な変化をよくとらえていて，やがて自分が好き

な色調ができるまで粘り強くやり続ける姿も印象的であった。また子どもたちは今回の活動を通じて、言葉によらないコミュニケーションを行っていた。こうした感覚の交流は、とても大切であると考えている。

(2) 学習内容について

子どもたちにとって、ブータン以外の“Art”に触れる機会が大切であることにあらためて気付くことができた。また教科書に掲載されていない学習内容には、子どもたちの学びがより豊かになるヒントが潜んでいることに気付いた。例えば、“Art”に関して言えば、子どもたちの“Art”に対する考え方が広がる可能性が挙げられる。またブータン人にとっては、美しい形や色と出会うことはもちろん、その美しい色を自分たちの生活に生かしていこうとすることも大切な可能性である。さらに“Recycle”につながっていくことも重要だ。子どもたちはマーブリングで彩色した和紙を何に使うことができるかを考えていたが、これは私たち教師も考えていくべき問題である。子どもたちから意見が出ていたように、再生紙でつくったバッグをマーブリングで飾り、それを市場で売るなどして“Recycle”の学習として発展させることも考えられるだろう。また彩色した団扇は、それぞれの子どもに渡してしまふよりも、校内に展示をするなどして、本校の子ども全員がブータン以外の“Art”に触れることのできる学校の財産として大切にしていきたい。

IV 青年海外協力隊員による造形教育実践の参観とインタビュー調査

1. フィールド・エントリーの経緯と対象

クシジャン小中学校 (Kushugchen Middle Secondary school) は、2001年に初等学校 (Primary school) として設立されて以来、在籍する子ども達が成長するにつれ、前期中等学校 (Lower Secondary school)、さらには後期中等学校 (Middle Secondary school) を擁する規模に至っている公立学校である。在籍生徒数は460名である。立地は、ティンブー市街から車で1時間余り北方の山あい々に位置しており、通学に徒歩で1時間以上かかる子どももいるという。同校では、JICA (Japan International Cooperation Agency・独立行政法人国際協力機構) から派遣された青年海外協力隊員である日本人 (E氏) が、ブータン王国では必修科目になっていない造形の授業 (同校では、“Art & Craft”と呼んでいる) を実践している。そこで、E氏が指導する授業の参観およびE氏へのインタビュー調査を行った。

2. 授業の参観

(1) “Let’s make the rainy day!” の授業実践

はじめに参観したのは、雨の日の様子を鉛筆および色鉛筆を使って絵に表す題材を扱った ClassIV (小学校4年生) を対象にした授業実践である。黒板には、本題材の活動概要を示す内容が次のように記述されていた。

Let’s make the rainy day! ① Think about the story ② Put the name of the story ③ Draw pictures
--

授業では子どもたちが、画用紙の裏に雨の日まつわる物語を文章で記しながら発想していた。(図7) また上掲の板書からわかるように、絵に表す前段階で、発想した物語に“name”を付すことが指示されている。つまりこの授業では、「雨の日」というテーマから広がるイメージよりも、子どもたちの生活経験としての「雨の日」まつわる物語を絵に表すことをねらっているということである。実際に子どもたちが表現していた内容は、雨の日でも外で元気に遊んだ時の様子であったり、家の中で過ごした光景であったりした。



図7 “Let’s make the rainy day!” の学習の様子

(2) “Let’s produce your favorite cloth!” の授業実践

次に参観したのは、数学の授業で作成した幾何学図形 (図8) を一つ以上取り入れて衣服をデザインするという授業実践である。対象は ClassVI (小学校6年生) である。ここで扱われる衣服は、子どもたちが学校の制服として着用しているようなブータン王国の伝統衣装である「ゴ」や「キラ」ではなく、いわゆる洋服であった⁶⁾。黒板にはそのことを指す教師による示範の絵が描かれていた。(図9) 子どもたちは画用紙に鉛筆で衣服の

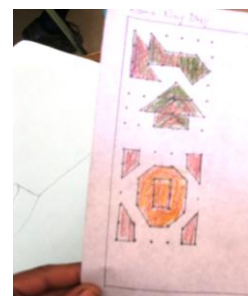


図8 数学の学習で作成した幾何学図形

輪郭を描き，その中に幾何学図形を取り入れた模様を配置し，衣服のデザインに取り組んでいた。



図9 “Let's produce your favorite cloth!”における板書

3. 授業者E氏へのインタビュー

授業者のE氏は，日本の大学の教育学部を卒業し，一昨年に青年海外協力隊の教育普及ボランティアとしてブータン王国に派遣された。大学時代の専攻は数学教育であったが，個人的に美術への興味があり，クシジャン小中学校に赴任した本年度当初より，Class IからClass VIIまでの“Art & Craft”の授業を担当している。

E氏へのインタビューは，授業の合間を縫って行われた。以下はその要点である。

- “Art & Craft”の授業で目指しているのは「ものを生み出す喜び」である。ブータンでは，伝統美術のように，手で何かを生み出すことの価値に重きを置いている。
- 題材は，教育省から送付してもらっているインドの教科書を参考にして設定している。
- 授業で大切にしていることは，“Art & Craft”の授業であっても，他教科の授業との関連を持たせることである。それは学んだことが生活に生きるようにするための工夫でもある。

V 授業設計に関するインタビュー調査

1. フィールド・エントリーの経緯と対象

本研究では，ブータン王国の造形教育について，実践レベルで検討することを目的としている。したがって，ブータン王国では授業実践をつくる営み，すなわち授業設計に対して，どのような考え方をもち，またどのような方法を採用しているのかを明らかにする必要がある。

そこで，ティンパー市街のはずれにあるバベサ小学校 (Babesa Primary School) のJigne Norumu 学校長に対して授業設計の具体的方法に関するインタビュー調査を行った。以下，その内容を学習指導案の作成と子どもに対する評価活動 (以降，“学習評価”と記す) の観点から整理して示す。

2. Jigne Norumu 氏に対するインタビュー

(1) 学習指導案の作成について

現在，ブータン王国では，学習指導案のフォーマットは，教育省から提示された全国共通のものを使っている。それは，「学校目標」から「一単位時間の授業実践」までの一貫した構造の中に位置付くものとなっている。まず各学校では，GNHの4つの柱と9つの指標に基づき，“Vision”，“Mission”，“Motto”，“Goals”といった“School Policy”が設定される。そしてそれらを目指した教育活動として，年間の教育課程が記された“Academic Yearly Calendar”を基にして“Yearly Plan” (図10) が編成される。続いて，月毎の教育計画を定めた“Block Plan” (図11) が編成され，さらにそれを週毎の教育計画として細分化した“Weekly Plan”が作成される。そして最終的にそれを毎時間の教育実践として計画された“Daily Plan” (図12) に具体化される。この“Daily Plan”は，我国の「学習指導案」に相当するものであり，先述したようにその項目は図13のように，教育省から配布されるフ

English Class II		YEARLY PLAN 2011			
	Week 1	Week 2	Week 3	Week 4	
28.2.2011 - 5.3.2011	7.3.2011 - 12.3.2011	14.3.2011 - 19.3.2011	21.3.2011 - 26.3.2011	28.3.2011 - 2.4.2011	
LOCK 1	Unit 1 - 2	The Great Monday	Unit 10 - 11	Revised Reading	
4.4.2011 - 9.4.2011	11.4.2011 - 16.4.2011	18.4.2011 - 23.4.2011	25.4.2011 - 30.4.2011	1.5.2011 - 6.5.2011	
LOCK 2	Unit 3 - 4	Unit 5 - 6	Unit 7 - 8	Spring Term end	
16.5.2011 - 21.5.2011	23.5.2011 - 28.5.2011	30.5.2011 - 4.6.2011	6.6.2011 - 11.6.2011	13.6.2011 - 18.6.2011	
LOCK 3	The Body Book	Unit 9 - 10	Unit 11 - 12	Summer Holiday	
23.7.2011 - 28.7.2011	29.7.2011 - 3.8.2011	5.8.2011 - 10.8.2011	12.8.2011 - 17.8.2011	19.8.2011 - 24.8.2011	

図10 “Yearly Plan”

Class II - MATHS		BLOCK 01		
	Monday	Tuesday	Wednesday	
28.2.2011	29.2.2011	1.3.2011	2.3.2011	
Week 1	Revision numbers	Place Value	Place Value	
	Obj 1 Act 1	Obj 1 Act 2	Obj 1 Act 1	
7.3.2011	8.3.2011	9.3.2011	10.3.2011	
Week 2	Place Value	Place Value	Place Value	
	Obj 1 Act 2	Obj 1 Act 1	Obj 1 Act 2	
14.3.2011	15.3.2011	16.3.2011	17.3.2011	

図11 “Block Plan”

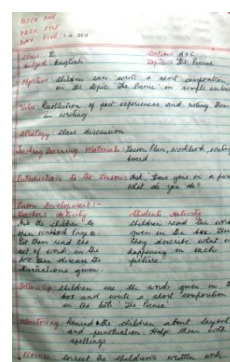


図12 “Daily Plan”

Block - _____ Week - _____
 Class - _____ Section - _____ Date - _____
 Subject - _____
 Topics - _____
 Objectives/Values - _____

Teaching Strategies	Teaching Aids	Previous Lesson
	Teacher's Activity	Student's Activity
Introduction		
Lesson Development		
Follow Up		
Closure		
Reflection		

図13 “Daily Plan” のフォーマット

フォーマットとして全国共通のものとなっている。

(2) 学習評価の実施について

学習評価は、教育省がアメリカ合衆国やシンガポールで実践されているものを取り入れた内容や方法を教育現場に適用する方向性が強まっている。学習指導案と同様に、子ども一人ひとりに対する学習評価も、学校全体の運営との関連から考えられているのである。“Towards educating for GNH - A guide to school self assessment (SSA) tool and school improvement plan (SIP)” (『GNHのための教育に向けて：学校の自己評価 (SSA) ツールと学校改善計画 (SIP) のためのガイド』)によれば、各学校は教育活動に対する自己評価と改善計画を教育省に提出することが義務付けられている。学校長は、15ページに渡る膨大な評価項目に対する評価内容と改善計画の作成を行うことを要請されているのである。そしてその根拠となるのが、各教員がそれぞれの担当授業において、一人ひとりの子どもに対して行う学習評価である。それは“on going”による継続的な評価とペーパー・テストによる評価との総合で行われる。図14は、実際に教師が作成した英語科

Class	Learning and Learning Strategy (2)	Reading Strand (2)	Writing Strand (2)	Assessment
1	6	6	4	2
2	5	6	3	4
3	4	5	2	1
4	6	5	5	2
5	4	5	4	2
6	4	3	4	2
7	5	3	4	2
8	4	3	3	1
9	6	6	4	3
10	4	3	4	1
11	4	3	4	2

図14 学習評価一覧表 (一部画像処理)

の授業における学習評価一覧表である⁷⁾。こうした評価結果は、その蓄積によって学校の教育計画改善への貴重な資料となる。そうした意味で、評価活動は、学校運営の一環であると認識されている。

3. ブータン王国における授業設計の考え方

ブータン王国の教師たちが日々の授業実践のために作成する“Daily Plan”は、その項目から見ればわかるように、我国に見られる略案形式の学習指導案と近似している。そして先述したように、この“Daily Plan”の作成に至るまでには、教育省が示した教育理念に基づいて編成された学校全体の教育計画から、空間的・時間的に徐々に焦点化されていくプロセスを経ていく。こうした学習指導案の作成プロセスは、我国と同様なあり様を示していると言えよう。しかしながら、これらのプランを学校長が逐一チェックすることが、2008年より義務付けられていると

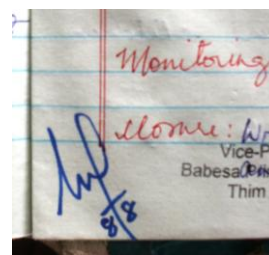


図15 学校長のチェックサイン

いう。(図15) 我国においても同様な管理は行われているが、一つ決定的な違いがある。それは、授業実践が検討される場が、こうした行政的・管理的な機会に偏っており、現場教師による主体的な授業研究が存在していないことである。インタビューによれば、同僚の教師同士で授業を公開して協議するという機会は一切行われていないとのことであった。大学などの研究者が授業を参観することもあるが、それは先述した“SSA(学校の自己評価)”や“SIP(学校改善計画)”といった教育行政的な指導の一環として行われているようである。ここにおいて、ブータン王国における授業実践は、学校運営の視点に基づく管理的指導によって支えられている面が大きい。また“on going”によるプロセスを重視した評価を通して、子どもの学習状況と成長発達の道筋を丁寧にとらえようとしているにもかかわらず、その評価結果には学校運営の改善と向上に資するための資料としての意味合いが強く求められていることには驚きを覚えざるを得ない。

VI ブータン王国における造形教育実践の意義

これまでの現地調査における実践研究やインタビュー調査の結果から、前研究で見出した造形教育の教育的意義を実践的に分析してみたい。

1. 新しい意味や価値を生成するための教育としての意義

ジグメ・ロセル小学校における授業実践で扱ったマーブリング技法は、ブータンの子どもたちが初めて出会う美術文化であり、造形感覚の発揮を促すものであった。このことは、本授業実践の学習目標でもあり、前研究で見出された「新しい意味や価値を生成するための教育」としての意義に結びつく。しかしながら、前研究において見出されたこの意義は、学校教育外における教育活動（非営利芸術組織“バスト・ブータン”（VAST Bhutan））から析出された可能性としての意義であり、現状としては学校教育に認められるものではない。つまり、このような造形感覚の発揮という学習目標は、現在のブータン王国における学校教育には受け入れられないものかもしれないのである。しかしながら授業実践では、子どもたちのこの技法に対する興味・関心は高く、また教師たちもそうした子どもたちの姿勢を高く評価していることから、創造的な価値に対する教育的意義を認めていることが明らかになった。

ここにおいて、ブータン王国の学校教育には「新しい意味や価値を生成するための教育としての意義」を受容する土壌が存在していると考えられるのではなからうか。

2. 主体的な問題解決を促す教育としての意義

一方で、上述したような形や色の美しさを味わうという感覚の発揮に価値を認めながらも、ジグメ・ロセル小学校の学校長に対するインタビューからは、感覚の発揮に伴う能動性から引き出される問題解決能力を重視していることがうかがえる。また授業終末で、子どもたちからマーブリングを生活に生かすアイデアが出ていたこと、そして学校長自身も、マーブリングを今後の教育活動でどう活用していくかという考察を即座に行っていたことから、学習したことを学校生活さらには社会へと広げていく問題解決能力を重視していることがわかる。さらに授業冒頭で、筆者が子どもたちに伝えたマーブリング技法に関する説明内容を、学級担任教師が板書化していたこと、さらに学校長がその内容を子どもたちに復唱させていたことから、その問題解決能力は、学習内容の確実な習得を前提としていることがわかる。

また、クシジャン小中学校で参観した造形教育実践は、いずれも子どもの生活に即した内容であった。題材“Let's make the rainy day!”における想像活動とは、はじめに子どもが自らの生活体験を想起することから始まっている。ここでの想像とは、「雨の日」というごく日常の生活の具体的な出来事であり、伝統的な営みやファンタジーの世界ではない。日常生活を表現させようとするこうした立場は、現在の我国

の図画工作・美術科教育における「イメージ生成」重視の立場とは一線を画しているように見える。⁸⁾このことは、題材“Let's produce your favorite cloth!”にも該当する。この題材で扱われていたのは、ブータン王国の伝統的な衣装でもないし、見たこともないファンタジーな衣装でもない。それは子どもたちが日常生活で身に付ける衣服である。こうした設定は、E氏の造形教育実践が他教科との関連を重視していることも大きく関係しているだろう。

3. 関係性を構築するための教育としての意義

ジグメ・ロセル小学校の子どもたちが見せてくれた生活へのまなざしは、学校での学習が生活全般へと広がっていく必然性への着眼を示している。そしてそこでは、機能や用途、目的を基にした生活場面への応用を通じた関係性が存在している。こうした生活場面における関係性は、クシジャン小中学校の授業実践の題材にも具現化されている。また、ジグメ・ロセル小学校で、マーブリング技法を行う子ども同士が、言葉によらずに形や色の変化する様子を、自然に、一緒に味わっていた姿からは、感覚や価値の共有という関係性を見出すことができる。さらに教師もその関係性に意義を認めていた。ここにおいて、ブータン王国が敬虔な仏教国家であることが思い起こされる。実は仏教に基づく互助の精神が、こうした何気ない場面における関係性を生み出しているのだと考えられよう⁹⁾。ブータン王国では、仏像を「鑑賞」する者はいないと言われている¹⁰⁾。それは、あくまでも「祈り」の対象である。こうしたことから、ブータン王国の造形教育実践においては、仏教そのものを具現化する伝統美術を教材として対象化するのではなく、むしろそこに根付いている互助の精神を、日々の生活における「関係性の構築」として教材化していくことに意義があるのではなからうか。

さらにババサ小学校におけるインタビュー調査で明らかになったように、ブータン王国における授業設計とは、教育現場の教師が、目の前の子どもの実態に即してよりよい授業のあり方を志向するような、教育現場における開発的な機能を有するというよりも、国家が目指す教育の方向性を教育実践として具現化するための機能として位置付けている。したがって、ブータン王国における造形教育実践には、ブータン王国が最優先課題としているGNH理念を具現化するための手段として可能性が存在していると言えるのではなからうか。そのGNHには、次のように4つの柱とそれを計測するための9つの指標がある¹¹⁾。4本柱とは、①健全な社会経済の自立、②環境保護、③文化の保護と振興、④よき政治であり、9つの指標とは、①生活水準、②文化の多様性、③人々の健康、④精神衛生、⑤教育、⑥時間の使い方、⑦コミュニティの活

力, ⑧自然環境, ⑨よき政治である¹²⁾。これらGNHの様相が示しているのは, まさしく互助の精神であり, 自然や文化をも包摂したホリスティックな関係性である。ここにおいて, これまでに見てきた造形教育実践がGNHの理念と重なることにあらためて気付くことができよう。

VII 結語 : 今後の課題と展望

本研究では, 前研究で見出されたブータン王国における造形教育の意義に対して, 学校教育における授業実践を通じた実証的な考察を加え, 今後の造形教育実践の可能性を検討した。しかしこれは可能性である域を出ず, 仮説としての限界を有しており, 調査の継続が必要である。そして本研究の現地調査後に, 平成25年度よりブータン王国のナショナル・カリキュラムに“Art (仮称)”の科目が必修教科として導入される計画があることを確認している。そして現在, その教科カリキュラムが, JICAの関係者が参与しながら編纂されつつあるという。この動きについて調査を進め, グローバリズムに対抗するかのように見えるブータン王国が, 今後どのような造形教育の方向性を探っていくのか注目していきたい。

末尾になりましたが, 本研究に際して誠実にご対応いただいたブータンで出会ったすべての方々に深く御礼申し上げます。とりわけ,

ジグメ・ロセル小学校の子どもたちからは, 教育の尊さを再認識させていただきました。ここにあらためて感謝いたします。

註

- 1) 大泉義一「ブータン王国の造形教育 -GNHから見出されるデザイン教育としての可能性-」大学美術教育学会誌44号, 2012年, pp.127~134
- 2) 同掲, p.133
- 3) ブータン王国に入国し, 現地調査を行う際には, ビザ取得の他に, 厳重な規定が存在している。詳しくは, 前掲書, p.128を参照されたい。
- 4) 当然のことながら, それはGNHとの関連において検討される。
- 5) 事前に現地ガイドとの打合せで確認している。
- 6) 河添恵子編『ブータンの小学生・5 ……アジアの小学生』学研教育出版, 2011年, p.13
- 7) この評価一覧表の撮影と画像処理をした上での論文への掲載については, 学校長より許可を得ている。
- 8) 小学校図画工作科, および中学校美術科の現行学習指導要領において, [共通事項]が新設されたことによるイメージ重視の方向性を指している。
- 9) 大橋照枝『幸福立国ブータン -小さな国際国家の大きな挑戦-』白水社, 2010年, pp.92~93
- 10) アスペクトブータン取材班『幸福王国ブータンの智慧』アスペクト出版, 2009年, pp.124~125
- 11) 宮下史明「GNH (国民総幸福量) の概念とブータン王国の将来 -GNP からGNHへ-」早稲田商學, 2009年, p.51
- 12) 津川啓明「貧しさは不幸なことか: ブータンの開発から考える」龍谷大学経済学論集・46(5), 2007年, pp.144~145

Art Education in the Kingdom of Bhutan II

— Possibility of Art Education through the Practical Study —

OIZUMI, Yoshiichi

Yokohama National University

The purpose of this study is to examine practical the significance of Art education, that found in previous studies. So I made a field survey following.

- Interviews with teacher, and teaching practice of art education by the author in the local school.
- Interviews and class visits to an art education classes in local schools
- Interview Survey on instructional design of lesson to teachers of local school.

As described above, the focus on the teaching practice of Art Education in school education, he conducted a survey. And were analyzed as follows the significance of Art Education in the Kingdom of Bhutan. "Marbling technique" was the first time mentioned to Art and Culture, for the children of the Kingdom of Bhutan. However, children had higher interests. Teachers had praised the state of these children also. This suggested that has recognized the significance of the value of creative education. I found that an emphasis on problem-solving skills, such as we spread into school life and social life on the basis of that drawn from the exercise of an active sense, learned in the classroom. To art education in school education, the relationships that are built through its application to life situations that are based on features and applications is present. In addition, design for lesson has been made in the Kingdom of Bhutan is equipped with a position as a function of like is to embody the concept of education by the government. Therefore, in practice Art Education in the Kingdom of Bhutan, the potential as a means for the realization of GNH with an emphasis on holistic relationship with the natural and cultural inclusion is present.